大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

ラクロの『危険な関係』のひとつの読み方：リベルテとリベルティナージュの呪縛構造をめぐって

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉村, 昌昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011200

ラクロの『危険な関係』のひとつの読み方

——リベルテとリベルティナージュの呪縛構造をめぐって——

杉村昌昭

はじめに

フランス十八世紀を支配した基本精神は、十九世紀の多くの作家や批評家達がロマンチックに思い描いたような、優雅な趣味と華麗な遊戯にのみ徹したものではなかった。ホイジンガの言うように、たしかに「十八世紀は遊び的な、遊び好きなもろもろの要素で充たされた時代として、たびたびわれわれの前に登場した[1]」。ただし、「十九世紀は前世紀の遊びの性格に対するセンスを見失ってしまったが、それでいてその遊びの性格の奥に隠されている真面目さにも気がつかなかった[2]」という指摘も同時に考え合わせる必要がある。さらにホイジンガを援用すれば、「十八世紀の精神がさまざまのモチーフを遊びながらも、そのなかで意識的に自然へ還る道をまさぐっていた[…][3]」という洞察は、単に美術・芸術の様式という側面からだけではなく、とりわけフランス十八世紀の思想家達の生活と思考の秩序形態（フォルム）の特徴という観点から捉えた時、きわめて含蓄の深い言葉にならないだろうか。——すなわち、十八世紀ほど、クラブ、サロン、カフェ等における、奢侈、ペダンティックな会話、派出な男女交際等の融合という快楽追求的な文明の「放縦」（libertinage）の風俗そのものの中において、人間や社会に対する原理的考察と既成秩序に対するラディカルな批判精神がめばえ、着実に形成されていった時代はなかったであろう。そし

て、そうした一見軽薄な遊びの文化の中に懐胎した真面目な思考精神のよりどころとなったのは、人間の理性（raison）と経験（expérience）であり、この二つの思索活動と生活実践の歯車のかみあわせを源泉として、「自然」（nature）、「幸福」（bonheur）、「美徳」（vertu）等、十八世紀という時代の倫理的価値構造や生活哲学の特質を思想史的に解明するための鍵となるいくつかの連係概念が生み出されていったのだが、中でも重要なのは、「自由」（liberté）の観念の十八世紀的出自であろう。アンシアン・レジームという専制的な絶対君主制下に生きる人々にとって、この「自由」の問題ほど切実なものはなかった。それは、フランス大革命に集約的に表出されていく、十八世紀フランス社会思想史の流れを一瞥してみれば、容易に理解される。

ところで、ジャック・プルーストによれば、十八世紀フランスの合理的精神を代表する作家や哲学者達の社会観・人間観の革新への思想的営為の根底には、libertinage（以下リベルティナージュと表記する）の観念から liberté（以下リベルテと表記する）の観念を区別・精錬していくという一貫した倫理的思考の原型が存在した。[4] なるほど、十八世紀フランス社会の変遷は、このリベルテの観念が、市民生活（ブルジョワジー）の物的・精神的枠組みを拡大する反体制的な社会的・政治的実践体として、個々の人間の内的性向の恣意的な表現を概括するリベルティナージュの観念から識別されつつ、歴史を動かすダイナモの役割を引き受けていった過程に対応しているといえよう。十八世紀におけるリベルテの観念は、たしかに、人間の享受すべき当然の社会的権利の要求と実現という社会変革に果たした実際的機能からみれば、人間の本能的な欲求の直接的で雑多な表現行為の抽象概念としてのリベルティナージュ（道徳的放逸）[5] の観念を疎隔しつつ自己確立していったのであろう。ただしリベルティナージュの十八世紀観念には、その反抗様態がきわめて拡散的になったとはいえ、真正リベルタンの反秩序＝反体制の思想的余韻が宿っていて、リベルテの観念と複雑な共鳴反応を起したことも事実だろう。リベルテの観念の理念的核心に、十六世紀以来脈々とつづくリベルタンの懐疑主義の立場――すべての権威（とりわけ宗教的権威）に対する徹底した個人主義を軸とし

た独立不羈の思想的磁場――と強く響応するものがあるのはその一つの証左ではなかろうか。理念としてのリベルテは、十八世紀全体を通じて、人間の多種多様な内的欲求を公平に取りこもうとする貪婪な精神活動の拠点として、リベルティナージュの本来的・派生的観念とふだんに接触反応をおこしつつ形成されていったとみなした方がよいようにおもわれる。あるいは、リベルテの観念は、リベルティナージュの観念の包容する広大な問題領域から、そのもっとも社会思想的に同化もしくは組織化されやすい部位を奪い取り、いわば、リベルティナージュを部分的に包みこみ伸び越える形で肥大・成熟していったともいえよう。

だから、一口にリベルティナージュからリベルテへといっても、そこには、必ずしも一方の衰退、他方の台頭による明確な選手交代のような現象があったわけではない。リベルテの観念が自立・発動していく過程に即応して、リベルティナージュの観念は多様な屈折をこうむりながらも姿をかえて生きつづけ、リベルテの観念に微妙な影響を与えた。リベルタンの貫徹した、信仰や倫理や規律に対する反逆精神の純粋培養による所産としての哲学的（フィロゾフィック）なリベルティナージュの観念が生成し、リベルテの観念に様ざまのヴァリエーションをもたらしたのである。それは、十八世紀の自由思想家達（とりわけ無神論的な傾向をもつ百科全書派の哲学者）に大きな影響を与えたのみならず、デュクロ、クレビヨン・フィス等のいわゆるリベルタン作家はいうまでもなく、アベ・プレヴォ、マリヴォーやルサージュからレチフやサドに至るまで、十八世紀のほとんどあらゆる小説創造のひたひだに食い込み、重要な哲学的・思想的意義をおびて機能した。十八世紀におけるリベルティナージュとリベルテという二つの観念の潮流は、リベルタンのもたらした精神革命の正系と異端の抗争として相互排除的に関連したというよりも、むしろ不即不離的に牽引しあう概念（あるいは理念）カップルとして、十八世紀の作家・哲学者達の創造活動の内部で、この世紀全般にわたって、微妙なディアレクティクを展開したようにおもわれる。

たとえばディドロは、「自分の精神を放蕩にふけらせておく（リベルティナージュ）」ことによって、「政治」や「恋愛」や「趣味」や

「哲学」についての自由な発想を得ることができた。[6] そして、『ラモーの甥』（一七六二年）の社交界の人間の日常生活を話題にしている条りの中で、穏健な進歩主義者「私」でさえ、本能充足主義のこじき哲学者「彼」に向かって、いわば一種のリベルティナージュ（官能充足）のアポロジーを展開する。[7] 一方ルソーは、『新エロイーズ』（一七六一年）の中で、サン＝プルゥに託して、リベルティナージュが人間の真の欲求に相応しないゆがめられ形骸化した結婚制度あるいは男女関係に起因することを指摘し、これを断罪する。[8]

このディドロとルソーのリベルティナージュの実践に対する意見の相違は、両者のリベルティナージュという観念の捉え方の位相のズレはあるにしても（ディドロは、リベルティナージュの人間本能充足の効用、その精神的意義に着目しているが、ルソーは、むしろリベルティナージュをゆがめられた人間性の表象とみなし、その道徳的側面に固執している）、十八世紀中葉から後半にかけての、リベルテとリベルティナージュとの歴史的役割の分岐点を示唆するものとして重要な意味を含んでいる。ディドロの場合は、リベルティナージュの包蔵する人間の内的真実の象徴性――リベルテの観念の枠を押しひろげる積極的機能――を評価し、一方ルソーの場合は、リベルティナージュを社会制度と人間関係のゆがみにもとづく人間の「真の存在」（être véritable）からの疎外――リベルテの喪失を象徴する堕落現象――として告発しているのである。そして歴史は、ディドロ的というよりはむしろルソー的な問題定立――リベルティナージュを排斥する方向での現実の社会構造の急進的な改革の必要性という視点――を軸として、体制批判のイデオロギーとしてのリベルテの観念――特権階級におけるリベルティナージュの告発――を強調しつつ、一七八九年に向かってしだいにその歩調を速めていくようにおもわれる。リベルテの観念は、やがてフランス十八世紀社会を誘導し総括する歴史の表舞台の主役に成長し、逆にリベルティナージュの観念は、しだいに舞台の裏側に後退し、時代の徒花としてひそかに、しかし激しく（サドやレチフのエネルギーを見よ）生きつづけるのである。

ともあれ、リベルテとリベルティナージュの観念が、作家達の創造的営為の中で、なお相互に緊密な交流の紐帯を保持しながらも、かなりはっきりと分極化現象をおこし、それぞれ独自の運命をたどりはじめたのは、十八世紀中葉（とくに一七六〇年代）以降のことではなかったかとおもわれる。ほぼこの時期を境にして、リベルテの観念は、社会変革の実践的意識を支える中核思想に定着しはじめ、人間が平等に享受すべき様ざまな社会的権利の獲得、および抑圧されていた具体的欲求の実現を推進する堅固な理念として、ブルジョワジーの生活意識の中に着実に創造され普及していった。一方、リベルティナージュの観念は、現実社会の変革を志向する実践的位相から疎外され、リベルタンの思想・哲学から受けついだ純粋に反社会的な意識の内的論理の中で異常に膨張していき、観念による観念の冒険という存在形態に変身していく。本来リベルタンの生活原理として具体性・現実性の感覚を強く宿したリベルティナージュの理念が、しだいに抽象的・思弁的な純粋観念に変質し、逆に、ある意味で本質的に衝動的・自然発生的な心的現象という曖昧な実体の翳りをともなったリベルテの意識が、具体的・現実的な実践原理に変貌していったのは、まさに十八世紀という合理精神と理性信仰の時代のパラドックスであった。

このリベルテとリベルティナージュをめぐる思想的アポリアの十八世紀的展開は、世紀末に至って避けがたい観念的ジレンマを触発し、その暴発的止揚の余韻は、たとえばサドの作品を特色づける意識と現実との埋めがたい断層に、終末的な響きをたててこだましている。サドの創造意欲を狂おしく駆り立てたデモンは、リベルティナージュという観念そのものの消滅を随伴する極端な形にまでいっきょにふくれあがろうとする、絶対的リベルテを希求する純粋意識の化身ではなかったろうか。そこでは、リベルテの意識は、社会という限定された実在空間の中における人間の個別的・具体的な要求の主張・実現という現実志向の道程から奔逸し、人間・世界・宇宙のすべてを呑み込む際限のない巨大な非現実の内部空間の中で、観念の自己増殖をつづけるのである。絶対的リベルテの享受による「幸福」(bonheur) の実現をめざすサドの観念哲学は、わけても『悪徳の栄え』（一七九七年）の随所に如実に示

されている。――サドにあっては、リベルティナージュの観念は、絶対的リベルテを直視する純粋意識の無限奈落の眩惑の中で自壊し、同時に、現実化・実体化の対象としてのリベルテの観念は、その母胎であった社会変革の理念的基盤としての「自然」(nature) の概念とともに崩壊する。サドの作品は、リベルテとリベルティナージュとの十八世紀的ディアレクティクの一つの必然的な帰結であると同時にその起爆装置として、十八世紀フランス思想史をしめくくる革命的エネルギーに転換したリベルテの社会的観念を主調とした最終楽章に、特異な不協和音を放っている。

I

ところで、一七八二年に出版され、当時上流社交界のおそるべき腐敗ぶりをあばいた小説として一大スキャンダルをまきおこした『危険な関係』の作者ラクロは、しばしばサドと比較される。それは、この両者が、ともに上流社会におけるリベルティナージュ（逸脱した閨房の秘事）を描いた風俗作家としての共通性をもっているという観点にもとづく。しかし、ロジェ・ヴァイヤンは、こうした類比（アナロジー）の不適当性を次のように指摘している。

「サド侯爵はもっとも古い家柄の血をひき、財産にもきわめて恵まれた大貴族であった。彼はリベルタンを描くことによって自己自身の姿を描いたのであった。一方ラクロは、自己の階級（エヌミ・ド・クラス）の敵、いわばサドの仲間達を描いたのだ。ともに王座と祭壇を攻撃したのだが、ただしその理由は対立するものであった。〔…〕一七八九年にサドは民衆の手でバスチーユの牢獄から解放されたのだが、革命家達がつくりあげようとしていた新しい世界の中に自らの居場所を見い出すことができなかった。〔…〕ラクロはと言えば、逆にその全精力を革命の中にそそぎこみ、革命のために大きな貢献をしたのである。[9]」

『危険な関係』を階級闘争という図式の中にからめとろうとするヴァイヤンの基本的視点から必然的に導き出さ

れたラクロ像である。ラクロがフランス大革命の渦中で果たした役割をいささか強調しすぎているきらいがあるが、重要な点は、サドが滅びゆく貴族社会の亡霊にとりつかれ観念の中にしか生きられなかったのに対して、ラクロは歴史の現実にきわめて密着した生を生きた、という事実の対比であろう。したがって、サドがリベルティナージュおよび純粋意識としてのリベルテというその倍率を無限に拡大できる観念のレンズを通してしかのぞきえなかった世界を、ラクロは複雑な様相を呈しはじめていた歴史的現実に依拠しつつ描きえたと想像することができる。ラクロは、『危険な関係』において、貴族社会のリベルティナージュの実態に目を向けそれを小説の前景に押し出してはいるものの、その創作意識の中枢部は、むしろ、歴史の試練を経てブルジョワジーの生活意識の内部で豊かに結実しつつあったリベルテの観念の境域に通底していたのではなかったろうか。

ところでラクロが、リベルテの問題をとりわけ女性解放という視点から捉えていた事実は、『危険な関係』出版の翌年に書きはじめられた彼の「女性論」（『女性の教育について』＝三部構成でプイアード双書に収められている未完のエセー）に明示されている。――その中から、ヴァイヤンが「自由（リベルテ）の絶対に抽象的（メタフィジック）ではない最初の定義の一つ[10]」と称賛する一節を引用してみよう。

「自然状態の女性は男性と同じように自由で力強い存在である。自己の能力を全面的に機能させることができるという点で自由であり、その能力が自己の欲求に匹敵するという点で力強い。さてこのような存在は幸福になることができるだろうか？それは多分〔原理的には〕可能である〔…〕[11]。」

ルソー思想の洗礼を受けたラクロの一面をうかがわせるこの「女性論」第二部の基本テーゼは、むろん必ずしも女性の問題についてのみ述べた文章とみなす必要はない。重要な点は、ヴァイヤンも言うように、「自由と幸福の概念と具体的欲求を満足させる可能性とがきわめて魅力的な方式で結びつけられている[12]」ということである。――さて、『危険な関係』の小説的秩序構成を利用したラクロの意識形象化行為（エクリチュール）の根底には、たしかに、この「自由と

幸福と具体的欲求」の結合という人間の自然な心情の理想的バランスの可能性が窒息の危機に瀕しているという、彼の直観的な状況認識が感じられる。そして、作品の深層部をひたすこの危機意識（＝批判精神）を覆い隠すような形で、明晰な幾何学的記述（エクリチュール）として小説的アスペクトの表層部に露出しているのが、リベルティナージュ（「女性誘惑術」）の方法論と現象学なのである。

これまで多くの批評家は、『危険な関係』を解釈するにあたって、リベルティナージュの観念（とりわけその快楽追求原理としての意義）に重心をおきすぎる傾向があったようにおもわれる。[13] たとえば、ジャン＝リュック・セーラは、「エロチシズム」の現象学と「悪」の論理に（Jean-Luc Seylaz, *Les Liaisons dangereuses et la création romanesque chez Laclos*, Droz, 1958）、アンドレ・マルローは、「意志」と「性」の混淆――「意志のエロス化（érotisation de la volonté）」――に（A. Marlaux, *Tableau de la littérature française XVIIe–XVIIIe siècles* (article Laclos), Gallimard, 1939）、ジャン・ジロドゥーは、「悪」の結合と「リベルティナージュ」のデュエットに（Jean Giraudoux, *Littérature* (article Laclos), Grasset, 1941）、それぞれこの作品の本質を求めている。それに対し、ロジェ・ヴァイヤンは、ボードレールがそのラクロ論のための覚え書に書き遺した「歴史の書」、「リベルタンの書物は大革命を注釈し説明する」[14]等の断片的考察を継承・発展させ、『危険な関係』の政治的・歴史的側面からのアプローチを試みている。とりわけヴァイヤンの特質は、『危険な関係』を解読するための鍵をラクロの「女性論」の中に求めつつ、時代の必然的要請としてのリベルテの視点を導入し、この小説の本質を貴族階級とブルジョワジーとの対立という図式で捉えようとした点にある。それは、いわば「『危険な関係』以後のラクロについて知られていることを起点としてこの小説を解釈する」立場であり、その意味では、「一七八九―一七九二年の革命家ラクロから一七八二年の小説家ラクロ」を遡行的に捉え、『危険な関係』を「政治的パンフレット」と規定したエミール・ダールの視点に通じる。[15] したがって、ダールと同様にヴァイヤンも、『危険な関係』に

おけるリベルテの問題を、主として作品外の情報から照射するという形をとり、この小説のメカニズムそのものの中に潜在しているとおもわれるリベルテの観念――とりわけそのリベルティナージュの観念との関係――についてはほとんど言及していない。しかし『危険な関係』では、革命家ラクロの中でブルジョワジーの具体的欲求として明瞭に発現した社会的・実践的位相におけるリベルテの問題というよりは、むしろ人間の内部の現実――単独的孤独的な思惟を支える内的意識――としてのリベルテへの関心（それはむろん社会的観念としてのリベルテの領域に結節しているのだが）が主調音になっているようにおもわれる。

ラクロは、『危険な関係』で、ブルジョワジーの革命理念としてのリベルテの観念の虚構的表現を直接的に企図しているわけではない。彼は、むしろ逆に、衰亡しつつある貴族社会におけるゆがめられたリベルテ（あるいはリベルテの喪失）と、そこに生きる人間達の内面的葛藤に照準を合わせているようにおもわれる。つまりラクロは、結果的には貴族階級を告発することによってブルジョワジー権力の正当性を主張したといえるのだが、その告発の対象は、貴族社会の腐敗・堕落の陽画としてのリベルティナージュ（道徳的放逸）というよりは、むしろそこにおける人間性の喪失――リベルテの不在――といういわば支配階級の生活の陰画であったとみなすべきであろう。リベルテの観念がブルジョワジーの内部に浸透・拡大することによって、特権的地位の動揺を予感しつつあった貴族階級の内部におけるリベルテの意識のあり様を追求するという、巧妙な斜視的＝双眼的視点の設定こそ、ラクロに人間存在の根源的状況を映像化することを可能にしたのであり、『危険な関係』という歴史的な謎にみちた書物が、たくまずして大革命を準備しつつあった無気味で不安な時代の深層的な精神構造にかんするもっともリアルな証言として現代に残りえたパラドックスも、そこに存在するのではなかろうか。

結論めいたことを先に述べてしまったが、ともあれ、『危険な関係』は、サドの作品とはまったく異った形において、リベルテとリベルティナージュとの十八世紀的ディアレクティクの一つの歴史的帰結を象徴する作品――こ

の二つの観念の緊張関係によって成立している小説――として捉えなおさなければならないようにおもわれる。以下の作品分析の目的は、リベルテとリベルティナージュという十八世紀に多様な錯綜の軌跡を描いた二つの観念が、『危険な関係』においてどのような形で発現・交錯しているかを仮説的・推理的に抽出することにある。

II

『危険な関係』は心理分析を主体とした恋愛小説でもなければ、上流社会の実態暴露を意図した風俗小説でもない。ルソーの『新エロイーズ』が感傷的な恋愛小説という体裁をとりながら、その根底に鋭い社会批判の意識が流れているように、『危険な関係』の真価は、上流社交界という特殊社会における畸型的な男女の生態を描きながら、社会秩序のもつ根源的・普遍的な虚偽構造を剔抉しえている点にある。

さて、読者の想像力をかきたて、作品のロマネスクな展開を可能にするこの多声的な（『危険な関係』は主要登場人物達の手になる「百七十五通」の書簡によって構成されている）「行動倫理」の複合模様（テクスト）は、根本的には二つの異質なロジックの抗争的な相関関係によって統合されている。「知性（アンテリジャンス）のロジック」と「心情（サンティマン）のロジック」である。この二つの相対立するロジックは、とりわけヴァルモン子爵の性格――心理構造――の中で緊密・複雑にねじれあうことによって、小説の筋（アントリグ）そのものをも支配していく。

『危険な関係』は、二人の女性の方法的誘惑の物語りである。犠牲者は、修道院を出たばかりのおぼこ娘セシル・ヴォランジュと、貞淑な人妻トゥールヴェル法院長夫人。二人を陥れるのは名うての放蕩児（リベルタン）ヴァルモン子爵（『危険な関係』においては、リベルタンという言葉は、「魂（アーム）」の救済を絶対的に拒否し女性を計画的に堕落させる人間という意味で使われている。そしてリベルティナージュはその実践哲学である[16]）、そして、その蔭で糸を引くのが奸計を自在に駆使する悪女メルトゥイユ侯爵夫人。二人の女性の誘惑は、ほとんど並行して行われる。セシルの

誘惑は、自己の名誉回復のための復讐を企図したメルトゥイユ夫人がヴァルモンに要請することに端を発する。ヴァルモンは、気にそまないこの申し入れを、メルトゥイユ夫人に取り入るためと自己の自尊心をみたすために、しぶしぶ引き受ける。しかしその後、ヴァルモンは、自分の着手していたトゥールヴェル夫人誘惑の妨害者が、ほかならぬセシルの母ヴォランジュ夫人であることを知り、セシル誘惑に本腰を入れる。そして、彼の自尊心を煽り立てるためにメルトゥイユ夫人がセシルに接近させたダンスニー騎士を巧みに利用して、ヴァルモンは目的を成就する。一方、トゥールヴェル夫人の誘惑は、敬虔で節操の堅い彼女の性格――誘惑のむずかしさ――に挑発を受けたヴァルモンの自発的意志にもとづく。彼は幾多の障害を乗りこえ、ついにトゥールヴェル夫人の誘惑に成功する。しかし征服にともなう知的喜びと同時に、自分がトゥールヴェル夫人に対して深い愛情を抱いていることを自覚する。だが、トゥールヴェル夫人を敵視するメルトゥイユ夫人の巧みな教唆によって、リベルティナージュのセオリー通り、ヴァルモンはトゥールヴェル夫人を征服後ただちに捨てる（トゥールヴェル夫人は、絶望のあまり錯乱状態に陥り死に至る）。思いのままにヴァルモンを操ったメルトゥイユ夫人は、今度はヴァルモンの接近をもはねつけ、ダンスニー騎士をそそのかして彼を決闘で殺させる。しかし、その悪徳の報いか天然痘にかかったメルトゥイユ夫人は、その面貌をそこなわれ、同時に訴訟に敗れて財産の大半を失う。

小説を要約することの無意味さ、とくに書簡体小説の荒筋を述べるということの空しさをあえてかえりみず書き記したが、それは、この小説から「知性のロジック」と「心情のロジック」とのかかわり方を析出し、それを根本的なテーマに結びつけるためには、一応物語の大筋を念頭におく必要があるとおもったからである。さて、これら主要登場人物達の意識と行動を取り巻いている異様にはりつめた空気を説明するためには、まず第一に、小説の舞台となっている十八世紀末の貴族社会が、その性愛風俗の次元で、一般に想像されるようには腐敗・堕落してはいなかったと仮定しなければならない。なぜなら、もしそれほど男女関係の退廃が著しい社会であったなら、女性を

誘惑するという行為は、罠を仕掛ける側にとっても、その犠牲となる側にとっても、なんら「危険」をともなわない安易で単純なものにすぎなかったであろうから。誘惑がこの小説に前提されているとおもわれるような大きな「危険」をともなった一つの冒険行為であるためには、それが露見した場合の、当事者双方に対する厳しい制裁の存在を想定しなければならない。

たとえば、トゥールヴェル夫人からヴァルモンに対する好意と信頼とを打ち明けられたヴォランジュ夫人の次のような戒めの言葉が、リベルタンの獲物になることの「危険」の性質を暗示する。「社交界の人たちはヴァルモンが姿を見せないことに気づきはじめたのです。もしあの人があの人の伯母さまと奥さまとのあいだに、第三者として、しばらくでも滞在していたことが世間に知れましたら、奥さまの評判はあの人の掌中に握られることになりましょう。それこそ女の身にふりかかってくる最も大きな不幸というものです。[17]」また一方、誘惑者にとっては、「恋のとりこ」になることがもっとも「危険」な事態をひきおこす。メルトゥイユ夫人のヴァルモンに対する次のような警告がそのことを明示している。「子爵さま、ちょっとお耳に入れておくべきかと思いますが、パリではあなたのお噂が話題となりはじめています。あなたのご不在に注目をはじめ、早くもその原因を見抜いているようです。昨日も非常に多くの方が集った晩餐会に出席しましたところ、あなたが小説的な不幸な恋のとりことなって田舎に引きとめられているのだと、はっきりそう言っている人もいました。[…]そんな危険な噂が根をはってしまわないうちに、すぐに戻って、それをぶちこわしておしまいになってはいかがですか。[18]」

「醜聞」、「名誉喪失」、「社交界からの抹殺」、「祖国からの追放」、そして最悪の場合には「死」と、制裁は状況に応じてエスカレートしたに違いない。事実、ヴァルモンは、たとえそれがメルトゥイユ夫人の個人的計略によるとはいえ、決闘で殺されるのである。女性を誘惑し破滅させることは、だから、自己の生全体を賭した真剣勝負、ヴァイヤンの表現を借りるならば「闘牛」などと同じように、[19]一つの固有の規則と偶然性をもった真面目で情熱的

「賭け」(jeu) なのである。そこに、この小説の横糸を形成する「知性のロジック」が介入する必然性があった。おのれの身をその「賭け」に賭し勝利をおさめるためには、冷静な観察と明晰な計算が必要である。そしてさらにつけ加えるならば、「危険」の度合いを測りつつ適確な行動にうつる強靱な意志の力。ヴァルモンが女性を誘惑し征服するに至るのは、まさに、この明敏な理性とほとんど禁欲的とさえいえる自己制御の意志にもとづく「知性のロジック」によってである。

しかし、このヴァルモンの勝利への上昇過程の内部には、同時に彼の破滅へのモメントが潜在していた。破局は「知性のロジック」の中絶によって突然もたらされるのではない。ヴァルモンは、リベルタンとしての責務には最後まで忠実にしたがおうとする。しかし彼は、自らの「演技」(jeu) と役割のマンネリズムに精神的に疲弊していた。ヴァルモンの「言動」の底辺には、最初から、リベルティナージュのセオリーが要求する「演技」の実践が日常的現実に化することによって、心理的に疎外された者の抱く「自己回帰」への願望が揺曳している。トゥールヴェル夫人との交流は、ヴァルモンの心の底にうごめいていたこのリベルティナージュの呪縛――「演技」の世界――から逃れたいという欲求を、徐々に顕在化させていく。そこに、この小説の縦糸として「心情のロジック」が介入する必然性があった。トゥールヴェル夫人においては、単一的な非合理的現象として終始する「心情」の世界は、背後にメルウィユ夫人を強く意識したヴァルモンの内部では、「知性のロジック」とたえざる反発・衝突をくり返しつつ一つの固有の連続的軌跡を描くことによって、一種のロジックとしての性格を所有している。『危険な関係』の比較的平板な物語の根底では、それぞれ独特の意義とニュアンスを含んだ「知性」と「心情」の二つのロジックが激しく切り結んでいるのである。

ジョルジュ・プーレは、『危険な関係』について次のように述べている。「一人の誘惑者による一人の犠牲者の計画的な征服という一つの小説の中に、犠牲者による誘惑者の非計画的な征服というもう一つの予測不可能な小説

が、こっそりと挿入される。そして、『危険な関係』の全過程において、この二つの反発しあう小説（ロマン）は、相互に浸透し、戦いあうことをやめない。[20]」物語の基本的展開の要約としては、たしかに正鵠を得ているが、この分析はさらに収斂させる必要がある。つまり、『危険な関係』には、相拮抗する二つの小説（ロマン）が存在するのではなく、「知性のロジック」（＝「計画的な征服」）と「心情のロジック」（＝「非計画的な征服」）という二つの垂直に交わる軸によって構成された、一つの立体的な構造をそなえた小説（ロマン）が体現されているのである。作者ラクロの創造行為に即していえば、事実あるいは現象を客観的に構成していくいわば「水平的」な「知性のロジック」に対して、「心情のロジック」は、それに意味づけをし相互に規定しあいながらこの小説にイデオロギー的価値を与えていく、いわば「垂直的」な軸として作用しているようにおもわれる。そして、「計画的な征服」を実現していく「知性のロジック」とは、いいかえればリベルティナージュのセオリーであり、一方「非計画的な征服」を結実させる「心情のロジック」とは、いわばリベルテの意識を核としている。『危険な関係』が思想小説としての性格をもちうるのは、このリベルテのテーマに導かれた「心情のロジック」が、リベルティナージュを支配する「知性のロジック」に鋭く交わっていくという、小説の内在的な基本構造の位相においてである。ルネ・ポモーの指摘するごとく、「『危険な関係』は、たとえ否認され愚弄されようとも、恋愛感情がいぜんとしてヴァルモンの心に現前しているからこそ意味のある小説となっている[21]」のである。「予測不可能な小説（ロマン・アプリオリ・インプレヴィジブル）」を、計画的・意識的に挿入したところに、作者ラクロのひそかな自己表現――この小説の核心――を見出す鍵がひそんでいるようにおもわれる。

さて、ヴァルモンの破滅は、逆説的にもトゥールヴェル夫人に対する「真実の愛」への覚醒によって決定されるのだが、それは、小説の後半に至って突然おとずれるのではない。ヴァルモンの愛は、冒頭からすでに、彼の意識と行動に微妙な陰翳を与える心理的アクセントとして発現し、リベルティナージュのセオリーにもとづく計画的行為のひだひだに徐々に食い込み、最後にはその実践意識を浸蝕する。それだからこそ、このヴァルモンの内面にお

ける愛のドラマを、単なる一つのエピソードあるいは副次的テーマとみなすのではなく、作者の深い意図を包含したこの小説全体に貫徹する「心情のロジック」の中軸として捉えなければならないのである。以下簡単に、ヴァルモンのトゥールヴェル夫人に対する感情の変遷をあとづけておこう。

▼「わたしは四日前から強烈な情熱にとらえられています。わたしがどんなに激しく欲望を燃えたたせて、障害を乗り越えていくかは、ご存じのとおりです。しかし、あなたがご存じないのは、孤独がいかに欲望の激しさを増大させるかということです。もはやわたしにはたった一つの思いしかなく、昼はそのことを思いつめ、夜はそれを夢みています。わたしは、彼女に首ったけだといって人から笑われないように、どうしてもあの女をものにしなければなりません。[22]」(第四信――メルトゥイユ夫人宛て)

▼「正直にお話ししましょう。われわれの冷淡で安易な交渉においては、われわれが幸福と呼んでいるものは、ほとんど快楽に値しないものです。実のことを申せば、わたしは心の張りがなくなってしまったと思っていました。もはや官能しか残っていないので早くも老いこんでしまったものと嘆いていました。ところが、トゥールヴェル夫人が青春の楽しい幻影をわたしに返してくれたのです。夫人のそばにおれば、享楽しないでも仕合わせです。[23]」(第六信――メルトゥイユ夫人宛て)

▼「しかし、なんという巡りあわせで、わたしはあんな女に執着しているのでしょう?わたしに世話をみてもらいたいと望んでいる女はほかに大勢います。わたしが世話をみてやると言えば、彼女たちは喜んでそれに応ずるでしょう。[…]それなのに、なぜ逃げていく快楽を追い、訪れてくる快楽をおろそかにするのでしょう?ああ!なぜでしょう?…わたしにはわかりません。ですが、わたしはひしひしと感ずるのです。[24]」(第百信――メルトゥイユ夫人宛て)

▼「二人は互いに完全な陶酔にひたりました。陶酔が快楽ののちまで残ったのは、わたしにとってははじめてのこ

とでした。わたしはやっとのことで夫人の腕から離れ、その膝下にひざまずいて、永遠の愛を誓いました。正直なところ、わたしが口にしたことは、心に思っていたことなのでした。とにかく、別れてからも夫人のことが頭から離れず、気をまぎらす努力は並大抵のものではありませんでした。[25]」（第百二十五信――メルトゥイユ夫人宛て）

▼「〔…〕わたしがどんなにトゥールヴェル夫人に未練を持っているかということです。夫人と別れているのはまったくたまりません。命の半分を夫人に捧げる幸福を、残りの半分の命で購いたいと思います。ああ！人間は恋によってしか幸福になれないのです。[26]」（第百五十五信――ダンスニー騎士宛て）

ヴァルモンの内部に描かれるこの半透明の「心情」の軌跡は、「誘惑に成功すること」を絶対の任務とし、「決して誘惑されてはならない[27]」という不文律をもったリベルティナージュの倫理（リベルタンの思想的自立の敵対物がかっては「神」であったのが、ここでは「恋愛」に変化していることに注意）が、彼の「真実の愛」への覚醒――「愛することの苦悩と喜び」――によって、ひそかに転覆されていく過程を表わしている。それはしかし、単に、「冷淡で安易な」愛欲生活の体験に疲れた放蕩児の新鮮な愛の世界を求める衝動と解してはならない。ヴァルモンのトゥールヴェル夫人に対する意識の変化（内的葛藤）が示すのは、実は、自己を拘束していた「演技」の世界から解放されることによって彼の内部に蘇生した人間の真の主体性の胎動――リベルテの意識の発芽形態――なのである。そして、それが彼の身の破滅につながるところに、『危険な関係』の歴史的・社会的ドラマとしての特異な象徴性が凝縮的に表現される。すなわち、ヴァルモンの破滅の真の原因は、単に彼が「真実の愛」への覚醒を遺漏することによってリベルティナージュの原則に抵触したという事実にあるのではなく、むしろそうした彼の「意識」と「言動」との一致が、メルトゥイユ夫人にとっては、彼ら二人の盟約の根源にある社交界の「言動規律」（règles du jeu）を侵犯したという意味を含んでいたことによると考えるべきであろう。ヴァルモンのリベルタンとしての危険性が公知の事実（第九信参照）でありながら、彼が社交界に跳梁していたということは、リベルティナージュ

のセオリーと社交界の「言動規律」とが基本的には矛盾するものではなかったことを暗示する。「わたしが口にしたことは、心に思っていたことなのでした（＝《Je pensais ce que je disais.》）」という言葉ほど、リベルティナージュのセオリーに反し、社交界の「言動規律」をおびやかすものはなかった。ヴァルモンは、自己の恋愛感情の真実性をメルトゥイユ夫人に見抜かれることによって墓穴を掘ったのだ。なぜなら、メルトゥイユ夫人にあっては、偽善者としての「演技」は、自己の肉体の一部――本性そのもの――に化してしまっていたのであり、したがって、ヴァルモンの「演技」の喪失――「演技」の否定――の告白は、彼女にとってもっとも許しがたい裏切行為にほかならなかったのだから。ヴァルモンは、しかし、自己のもっとも奥深い真実にめざめることによって、貴族社会における「偽装交際術」に対するアンチテーゼ――真のリベルテ享受への志向、人間意識の犯しがたい聖域の健在――を示した。そして、そのように人間復活を開始した彼を待ち受けていたのは、「死」というもっとも厳しい制裁であった。『危険な関係』は、上流社交界における、自己の内部を吐露すること――自己のリベルテの意識を「言動」に結びつけようとすること――の困難と危険を示唆している。

ヴァルモンの「演技」の喪失による加害者から被害者への転位は、社交界を支配していた「言動規律」の物神化されたような基本的拘束性を暗示する。ヴァルモンが誘惑に成功する二人の女性もまた、本質的には、ヴァルモンと同様に、「演技」の否定（ただしこれは、ヴァルモンにあってはほとんど自覚的な――ヴァルモンのメルトゥイユ夫人に対する告白は一種の未必の故意とみなすことができる――自己の内面の一八〇度転換の結果であったのだが、セシルとトゥールヴェル夫人の場合は、「演技」に対する最初からの無知あるいは一種の認識不足という性質をおびている）によって、犠牲者となるのである。すなわち、「演技」の世界への帰属意識こそ、社交界において個々人が自己の身の安全をはかるために獲得し、決して失ってはならない共通のパスポートであったとみなすことができよう。

さて、セシルとトゥールヴェル夫人は、ともに、いまだ社交界における「言動規律」を充分に呑み込んでいない

女性として設定されている。セシルは、修道院を出て社交界に顔見せをしたばかりの、うぶな世間知らずである。彼女は、冒頭から、「ほんとに、社交界なんて、あたしたちが想像していたほど楽しいところじゃありませんわね。」[28]（第三信）と、暗に社交界における堅苦しい「演技（ジュ）」の規則をにおわせる発言をしている。一方トゥールヴェル夫人は、最初からヴァルモンの常套的「演技（ジュ）」の罠にはまる。彼女は、社交界の常識となっているヴァルモンの性格・行動について無知であり、それはとりもなおさず自己を取り巻く世界における「演技（ジュ）」の遍在性に対する認識不足を表わす。そして、その無知と素朴を、社交界における一般的女性の典型として登場するヴォランジュ夫人に、二度にわたって強くたしなめられる（第九信および第三十二信参照）。トゥールヴェル夫人を破滅に追いやった一つの原因は、社交界の「演技（ジュ）」の規則（「行動倫理」のメカニズム）にあったということができよう。錯乱のあまり重い病の床についたトゥールヴェル夫人が、彼女を見舞ったヴォランジュ夫人に対して打明けた、「あなたを信じなかったばかりに死なねばならないのです。」[29]（第百四十七信）という言葉が、そのことを明確に証拠だてはしないだろうか。あるいはトゥールヴェル夫人は、社交界の「言動規律（レーグル・デュ・ジュ）」の隠微な制裁機能を知らなかったのではなく、その純真性ゆえに、あえて信じようとしなかったのだと解すべきかもしれない。ともあれ、ヴォランジュ夫人は、トゥールヴェル夫人を戒めた書簡で、ヴァルモン個人に対する警戒よりも、むしろ社交界の「交際規範（レーグル・デュ・ジュ）」を軽視することに対する危険性を警告したのだと考えねばならない。

Ⅲ

それでは、この社交界の人間関係を律していた不透明の「交際規範（レーグル・デュ・ジュ）」とは、いったいどのような歴史的性格をもっていたのだろうか。そのメカニズムの本質を作品の内部から析出することは可能だろうか。――この試みは、社交界にデビューしたばかりの無知なセシルと長年にわたる社交界生活の熟練者メルトゥイユ夫人との比較によっ

て、一つの指標を与えられるはずである。

セシルとメルトゥイユ夫人とはあらゆる点で対照的である。純情、率直、気まぐれで、自己の内面の動きに忠実なセシルに対し、非情、冷静、慎重で、自己の内面を決して人に見せないメルトゥイユ夫人。こうした外見的特徴のきわだった差異をもたらしているのは、この二人の他者に対する意識のあり様の根本的な相違である。セシルが他者に対する警戒心のまったく欠如したあけっぴろげな女性であるとするなら、一方メルトゥイユ夫人は他者を知りつくしたうえで自己の「言動」を緻密に創造していく。無防備で自然なセシルに対し、完全武装で人工的なメルトゥイユ夫人。様ざまな対比が可能であるが、要するにこの二人を決定的に異質の存在にしているのは、自己を「演出する」意識の有無——あるいは「演技」の巧拙——であろう。「演技」を社交界における至上の実践的武器とするメルトゥイユ夫人に対し、社交界における「演技」の価値、その必要性すら確認できずにいるセシル。——ところで、社会の現実的場面における「演技」とは、すなわち人間の「実体」(être)と「外見」(paraître)との意識的分離を意味する。[30] そこに、人間の内部と外部とを媒介する「演技」の現象学が、『危険な関係』を心理的・社会的ドラマ(社交界における「交際規範」に操られた)として解剖するための有効な方法たりうるゆえんがある。

「自己の魂の多様な動きを忠実にあとづける」セシルの「言葉」——「自発性」に特徴づけられたセシルの手紙の文体[31]——を批判して、メルトゥイユ夫人は次のように教訓を与える。

「文章にもっと気をつけて下さい。相変らずまるで子供の手紙ですね。どうしてそうなのか、わたしにはよくわかっています。思っていることはみんな書き、思っていないことはなにも書かないからです(=《Je vois bien d'où cela vient ; c'est que vous dites tout ce que vous pensez, et rien de ce que vous ne pensez pas.》[32])。」

(第百五信——追伸)。

この手短かな、しかし重要な訓戒を書き加えた時、メルトゥイユ夫人は自分の若い頃の姿をセシルに重ね合わせ

ていたのだろうか。セシルは、メルトゥイユ夫人にとって、社交界の内幕を知る以前の自己自身の姿にほかならなかったのかもしれない。――ともあれ、「自分の思ったままのことを人に知らせてはならない」というこの「実体」と「外見」との分離こそ、社交界の人間が体得し日常的に実践しなければならない「交際術」の原則であったのだ。この「交際術」の教程を完璧に身につけ、生活の隈々にまでわたって実践するメルトゥイユ夫人の見事な「愛の演技」は、とりわけ「第十信」における彼女の自己陶酔的な告白の中に躍動している。

「わたしはそのあいだずっと彼を喜ばせてあげようと心に決めていましたので、彼の激情をなるべく抑え、愛情のかわりに魅力的な嬌態を見せてあげました。人の気をひくためにあんなに気を配ったことはありませんでした。また、自分の腕にあれほど満足したこともありませんでした。〔…〕わたしは子供っぽく見せたり、分別くさくなったり、はしゃぐかと思えば、神経質になり、ときには淫らがましくさえもして、彼を後宮のサルタンと見なし、自分はつぎつぎとその寵姫となって打興じました。実際、彼が繰返し与える敬意を受けるのは、いつも同じ女でありながら、つねに新たな情婦が受けているといった具合でした。[38]」

メルトゥイユ夫人の自己の内面と外面の完全な分離・統制による多彩な「演技」は、ディドロが『俳優に関する逆説』（一七七三年）の中で展開した「演技論」の核心を現実の場景において見事に体現している。そしてそれは、社交界における人間関係を根底で支える「演技」の世界の性質を象徴しているかぎり、単に演劇的興味の対象となるのみならず、人間の「実体」と「外見」との乖離――近代的個人の二元分裂の発生――というすぐれて十八世紀的なテーマにつながる。

たとえばマリヴォーの劇においては、「実体」と「外見」との分離は、最初から劇的効果をあげるための要素として挿入された一つの作劇パターンにすぎない。[39] だからそれは、結局は舞台上で幸福な解消をとげ、自己完結的で純粋な「遊び劇」を支える中心的モメントとしての役割を果たしおえる。あらかじめ必然的に組み立てられた偶然

の因果律に誘導されるマリヴォー劇は、登場人物達が最後には自己の「仮面」をかなぐり捨てて「本物」に戻ることによって、ハッピー・エンドが予定調和的に想定されているといえよう。そこでは、「外見」(＝「仮面」)は、子供のたわいない「仮面遊び」の世界におけると同様に、比較的容易に看破し排除することのできる「障害」にすぎず、「透明」(＝「自己本来の姿に戻ること」)は、したがってなんら危険をともなわないばかりか、逆に自己の欲求を実現し幸福を約束するポジティブな行為にほかならない。「外見」と「実体」のテーマは、まだ空疎な虚構によって一つの単純なカタルシスをもたらす「遊び劇」の世界を成立させるための安易な道具にすぎなかったのだ。マリヴォー劇は、現実社会における「外見」と「実体」との分離の牧歌的パロディーとして、今日に至るまで社会と人間の内部に深く根をおろしているこの根元的な二元分裂が、人間心理の表層的な次元においてしか認識されていなかった時期の一般的な意識形態を示唆しているといえよう。

しかし十八世紀の時代精神は、人間の社会生活と意識構造を複雑に変えていく。マリヴォーの活躍した時代には、まだ観念的抽象性の域を脱しなかったリベルテの意識が、とりわけブルジョワジーの共通理念として、平等への志向と社会的諸権利の獲得という形でしだいに具現化・外在化していった一方で、個々の人間の内部には、協同的実践領域から欠落したリベルテの恣意的な諸観念が結晶・沈澱していった。そしてそれらの内向を余儀なくされた欲求の大半は、人間本能の解放観念としてのリベルティナージュ(道徳的放逸)の代謝経路に吸収され異化作用を受けて発散・昇華していったのだが、その残滓あるいは精粋は、個々人の意識の深層部に根をはる異物として凝固し、人間の心理的自己疎外の素因を形成していく。人間は、その異物の周囲に凝集される自己の内面的真実(＝「実体」)を自己自身の手で内密に規制・処理することをしいられ、社会に対する抜きがたい異和感を抱くようになるのである。それは、安定していた社会に亀裂が生じ、社会構造と人間関係が微妙にゆれはじめるのにともなって人間の状況意識が多様化し、現実世界における「演技」が必然的に発生する事情と表裏の関係にあるといえよう。

そしてこの表裏関係は、やがて人間の社会生活を全般的に支配する普遍的現象となっていく。「外見」と「実体」との分離は、人間にとってもはや観客席からその作為的な同一化を期待する「遊び劇」のカラクリではなく、自己自身が参加する解決へのパースペクティブを欠いた現実的ドラマの基本原理となる――「演技」は生活の中における一つの強制として定着しはじめるのである。

かくして、「仮面」は徐々に人間の肌に深く食いこみ、「本物」を侵略していく。人間は、完全に自己自身であろうとする意志――自己の本源的なアイデンティティーを所有する権利――を剝奪されていくのである。人間は社会生活の多くの場面において「演技者」としての「言動」しか許されなくなり、一種の「人格」喪失感にさいなまれるようになる。「仮面」はもはや容易には取りはずせない肉体の一部と化し、同時に「本物」との鋭い対立・葛藤を人間の意識の内部でくりひろげる。人間の内部と外部との分裂――意識の内部における本来的存在と他者的存在との相克――という、近代のもっとも大きな苦悩のドラマの一つの淵源をそこに求めることができよう。この「外見」と「実体」との意識的分離を認めず「演技」を拒否する者は、社会から抹殺され孤独に生きるほかはない。人間の「実体」を隠蔽するという理由で、「社交的儀礼」を拒否したルソーの運命を想起しよう。「透明」であろうと努力することは自己の身の破滅につながるのだ。

さて、『危険な関係』に描かれた行動倫理の成立基盤を理解するためには、純粋に「遊戯」的な宮廷作法（façons de cour）の裏面で機能していたもう一つの隠然たる「演技」の世界の伝統的役割を措定しなければならない。実際右に述べたような近代的な「外見」と「実体」との分離がきわめて意識的に要求され、それが早い時期からもっとも著しく歪曲された形で、「交際術」の影の部分を構成する約束事として定式化していったのは、権力に近く常に自己の周囲の動勢――他者の「言動」――に神経をはりつめていなければならない支配階級（貴族階級）においてではなかったろうか。そこでは「自己の真の姿を隠すこと」（＝「仮面」）は、自己の身の安全を確保し、安逸に暮

らしていくために誰もが身につけねばならない一つの身を賭した技術になる。社交界という集団的交流の場は、さらに普遍的に承認されパターン化された一種の自己疎外的な「作法」を生み出し、それは因襲的に受けつがれていく。こうして、「外見」と「実体」との分離は一つの閉鎖的な共同体の内部における暗黙の了解事項となり、人間を内側から束縛する「言動規律」の体系ができあがっていく。

ヴァイヤンの詳述したような、上流社交界で実践された「厳密な幾何学的法則性をもつリベルティナージュ」の体系は、こうした貴族社会における「意識」と「言動」との分離を基底とする日常的な「演技」の世界の確立と併行し、相互に影響を及ぼしあいながら成立していったのだろう。つまり、ヴァルモンやメルトゥイユ夫人のリベルタンとしての「意識」や「言動」は、「偽装交際術」という自己韜晦的な精神活動に支配された上流社交界の内部においてしか、人間の自己顕示的な精神活動——主体性の発現——として存立しえないのである。ジャン＝ジャック・サロモンは、「『危険な関係』とは、人を欺く者を欺かれる者に、賭博の熟達者を損をする者に、搾取する者を搾取される者に、要するに自由な人間を偶発的状況の奴隷に結びつける関係である」[86]と述べている。しかし、ヴァルモンやメルトゥイユ夫人が上流社交界のリベルタンとして構想し現実に適用する独自のリベルティナージュの観念は、彼らの本源的な自由意志に根ざしたものではなく、社交界の「言動規律」の副産物——「演技」の法則に厳密・精巧に合致する形で構築された一種の模倣的対応物——にすぎない（『危険な関係』はむろん社交界において実践されていた「偽装交際術」の辛辣なパロディーという性格をそなえているのであり、この作品が当時ひきおこした反響の性質がそれを証明している）。したがって、ヴァルモンもメルトゥイユ夫人も真に「自由な人間」ではありえないのである。いやむしろ逆に、彼らは、上流社交界という偏狭な密室的空間に生息する人間の観察にもとづいて、自らがその主体性を発揮するために創造したはずのリベルティナージュの体系の殉教者——非人間的な「演技のメカニズム」の奴隷——として、真の主体性（人間性）——リベルテの意識——の発現を内側から強く抑止

されているというべきであろう。『危険な関係』では、トゥールヴェル夫人とセシルのみならず、ヴァルモンもそしてメルトゥイユ夫人でさえ、一つの自閉的な「演技」の世界の犠牲者なのである。この小説からは、社交界における「言動規律」が、近代社会のあらゆる局面においてみられる人間の心理的自己疎外を支配する一つの基本的定式を先取り的に象徴していた事実――強力な包括的抑圧体系として機能していた事情――を読み取らねばならない。――社交界における「言動規律」は、人間が自己の「外見」と「実体」とを合一させようとする努力を粉砕する。要するに、人間が自己の「本心を吐露すること」（「透明」になること）の禁止によって存立するのである。それは、いいかえれば、個人のリベルテの意識の抑圧、その剝奪のメカニズムにほかならない。

この貴族社会を支配する「言動規律」のカラクリに無知なセシルは、ヴァルモンの「演技」を見抜くことができず、心の中の喜びや悲しみをありのままに吐露することによって犠牲者となった（セシルは犠牲者となることによって、はじめて自己のおかれていた状況――リベルテの意識の価値とそれを阻止するものの実体――に開眼したといえよう）。一方、この「言動規律」を破ることの脅威をヴォランジュ夫人に諭されたトゥールヴェル夫人は、つとめて自己の内部をさらけ出さないように、自己の内的現実の表現を自ら抑制する。AetY・デルマスは、「仮面の世界――メルトゥイユの世界――に対して彼女〔トゥールヴェル夫人〕は〈透明〉の世界を対置する」[96]と述べているが、自然な心情をもっとも豊かにそなえたトゥールヴェル夫人でさえ「仮面」への志向を秘めていることに注意しなければならない。手紙に示されたトゥールヴェル夫人の言葉使いは、「とりわけ控え目と羞恥心」[97]によって特色づけられているのだが、これは単に彼女の本性に由来する性格的特徴とみなしてはならない。彼女の外面を規定しているこの二つの基本的要素は、社交界における「偽装交際術」の重要性を意識しつつも、純朴で無器用な資質ゆえに巧妙に「外見」と「実体」とを分離することができない人間に許された、自己を隠蔽するための唯一の「演技」であったはずなのだ。「今日、体面を重んじる女性でしたら、周囲の男性を抑えるために控え目にしていなけ

ればなりません〔…〕」[38]（第十一信）という彼女自身の状況認識がその経緯をなによりも端的に示唆している。そして、トゥールヴェル夫人はヴァルモンの「愛の演技」によって、はじめて「自己の欲望の現実を受けいれ表現する」（「透明（トランスパランス）」になる）に至るのである。

したがって、セシルやトゥールヴェル夫人の性格造型も、単に物語の筋立てのためのモメントとして意匠されているのではなく、この小説の思想的旋律――「演技（ジュ）」のメカニズムの分解による人間把握――に深くかかわるべき必然性を負荷されていると考えなければならない。『危険な関係』はすべてが緊密な関連を保って仕組まれている小説であり、一つ一つの要素がそれぞれ自立したリアリティーをもちつつ、「演技（ジュ）」の現象学というフィルターを通過してリベルテとリベルティナージュとの葛藤という核心的テーマに収斂していくようにおもわれる。そして、小説の内在構造に隠されたこの歴史的テーマのもっとも端的な発露を、ヴァルモンの人物像――意識構造の変化と運命――に看取することができる。ヴァルモンは、トゥールヴェル夫人との交流を通して自己の欺瞞的「演技（ジュ）」（リベルティナージュの実践）に倦み、その意識の奥底から「透明（トランスパランス）」への欲望（リベルテの意識）が危険をはらんだ暗礁として突出してくる。そして最後には、自ら「仮面（マスク）」をはぎとるという暴挙によって、あくまでもリベルタンの「演技（ジュ）」を強要しようとするメルトゥイユ夫人の策略によって葬られる。メルトゥイユ夫人とダンスニーのヴァルモンに対する「連携的制裁」は、リベルティナージュの不文律と貴族社会の「言動規律（レークル・デュ・ジュ）」との変則的な結合の所産――伝統的秩序内で収束しうる事象――であったとみなすことができよう。逆にいえば、ヴァルモンの試みたリベルティナージュによる自己呪縛からの脱出――「自己回帰」（リベルテの復権）への志向――は、伝統的秩序の埒外に出てしまう営為であったがゆえに挫折したのだということになる。

十八世紀末の貴族社会は、かつてのような厳格な「言動規律（レークル・デュ・ジュ）」によっては支配されていなかったことは事実だろう。しかし、『危険な関係』における犠牲者達の運命から逆推するかぎり、その非人間的な「演技（ジュ）」のメカニズムは一部で充分に機能しつづけていたと考えられる。それは、とりわけリベルティナージュ（「女性誘惑術」）という特異な現象にかかわる領域で、冷酷に硬直した形で存続していたようにおもわれる。けれどもリベルティナージュのセオリーの忠実な信奉者メルトゥイユ夫人が、自分のひきおこした事件の噂が広まるや、「周囲から冷たい眼

で見られ四面楚歌の状態に陥る」（第百七十三信参照）事実は、旧来のリベルティナージュの観念そのものが当時の「言動規律」の実質に背離し、ほとんど普遍的意義を失うまでに風化していたことを象徴している。リベルテを希求する意識の波動は、ブルジョワジーのみならず、貴族社会の中にも隠微な形で現実的な変化をもたらしつつあったのだ。――長期にわたった権力の維持体制の動揺、貴族階級の内部解体の兆候、音楽の狂いはじめた「仮面」（「外見」）の舞踏会、『危険な関係』のドラマが成立する背景にはそうした事態を想定しなければならないようにおもわれる。

Ⅳ

『危険な関係』における「演技」（「外見」と「実体」との分離）のテーマは、単に主要登場人物達の運命――ラクロの表現行為の歴史的深層構造――にかかわるのみならず、書簡体小説というこの作品の形式に支えられた、主要登場人物達に共通する表現様式の実践的構造とも密接に結びついている。その特質をもっともよく示すのが、ヴァルモンのメルトゥイユ夫人宛ての手紙である。ヴァルモンは、セシルとトゥールヴェル夫人の誘惑工作の進展状況を逐一メルトゥイユ夫人に報告するのだが、その彼の記述法ほど、リベルタンの「演技」のカラクリを明瞭に開示してくれるものはない。すでに自分が完了した行動（「演技」）の場面を想起し、それに注釈をほどこしつつ筆をすすめていくヴァルモンの内部では、「演技者」（「外見」）と「観察者」（「実体」）という二つの役割が交錯する。彼は、自分が「演技者」として存在した場景を、あたかももう一人の自分がその場に居合わせ、彼とその相手役の心理、行為を注意深く観察していたかのごとく再現するのである。ヴァルモンは、いわば自己の「演技」（「外見」）を、自己の「本心」（「実体」）の視線でとらえかえしつつ、解剖・解説しているといえよう。すなわち、「演技者」としての自己の「姿」は、他者的存在にほかならず、それを客観化する意識の視線こそリベルタンとしての自己の本来的存在なのである。こうした反省を媒介とした、行為と意識の共時的再生による透明な自己告白によ

って、人間の「外見」と「実体」との分離をパロディー的な明晰さで描きえたところに、『危険な関係』が特異な心理分析を含んだ書簡体小説として成功した必然性がある。ヴァルモンが、トゥールヴェル夫人の陥落に成功した顚末を長々と語る「第百二十五信」は、まさにこの反省的・分析的な自己客体視の記述行為（エクリチュール）の構造をもっともよく示す箇所といえよう。

「〔…〕わたしはふたたび立ち上がりました。そして一瞬黙りこんで、さも偶然のように、狂おしい視線を夫人に投げかけました。この視線はいかにも錯乱しているように見えても、やはりものをちゃんと見すかす、観察の鋭いものでした。おどおどした物腰、高まる息づかい、全筋肉の痙攣（けいれん）、ふるえながら半ばあげられた両腕、こうしたすべては、こちらの思ったとおりの成果があがったことを十分に証明していました。しかし、色恋においては何事もぴたりと寄りそわねば完成しないのに、その場の二人はかなり離れていましたので、なによりもまず近づく必要がありました。うまくそうできるために、わたしはとっさに、この興奮した状態の印象を弱めずに、しかもそれが相手に与えた効果をしずめるのにふさわしい、見かけだけの平静さを装いました。[39]」

しかし、リベルタンの勝負を賭けた最終的場面で、「演技（ジュ）」の実践はヴァルモンにとってひそかに自己抑圧の原理に変質しはじめ、やがて自己の「真の存在」（être véritable）の表出そのものが「演技（ジュ）」の必要性を無化し、それになりかわっていくという逆説的現象が生じる。トゥールヴェル夫人と「完全な陶酔」にひたり、「永遠の愛を誓った」場面を反芻しつつ、ヴァルモンは言う――「正直なところ、わたしが口にしたことは、心に思っていたことなのでした。[40]」この意識と言葉（行為）との一致は、もっとも簡潔に「知性のロジック」と「心情のロジック」とのディアレクティクの一つの帰結を示唆し、同時に、『危険な関係』のドラマのクライマックスを予告する。ヴァルモンの「外見」と「実体」との分離に依拠しているこの小説のドラマ性は、それらが一体化した時点において終結にむかって急転回しはじめるのである。あるいは、ドラマがイロニックな「遊び劇（ジュ）」としての虚構的次元から歴

史的状況をトラジックに反映した現実的次元に移行するといった方がよいかもしれない。ヴァルモンは、ここに至って、自己の「透明（トランスパランス）」（「外見」と「実体」との合一した存在）をひそかに実現し、「真のリベルテ」を享受するための第一歩を踏み出したのだ。彼は、この時点においてのみ、トゥールヴェル夫人に対して、――彼女がそれを識別できたかどうかは別として、うそいつわりのない自己を開示したのである。しかし、皮肉にも、彼がこうした自己の内面の真実を暴露したのは、「不透明」なヴェールをかぶりつづけるメルトゥイユ夫人に対してであった。そして、この自己の真実――意識と言葉（行為）の一致――が、とりわけヴァルモンの運命を決定する。ヴァルモンが不用意にも（あるいは半意識的な積極的行為とも受け取れる）記したこの一句が、「あなたのお手紙を読みかえしてごらんなさい。順序はきちんとしていますが、一句ごとにご本心があらわれているではありませんか[41]」（第三十三信）と、すでに鋭い忠告を与えていたメルトゥイユ夫人にとっては、リベルティナージュの基本原理に対する決定的な冒瀆（彼女自身がかたくなに信じこみ守りつづけている社交界の「言動規律（レーグル・デュ・ジュ）」に対する違反行為）としてしかうつらなかったのは当然である。

書簡体小説という体裁から生じるもう一つの重要な問題は、作者ラクロと各登場人物との関係である。ラクロは、『危険な関係』の創作過程に関するティーヘの告白の中で、「登場人物、とくにメルトゥイユ夫人にはモデルがあったこと、自己の体験、見聞などを土台にして物語や人物像などをつくりあげたこと、ただ一つ自己の純粋な案出によるのがトゥールヴェル夫人の性格であること[42]」などを述べている。トゥールヴェル夫人の案出については、すでに示唆したように、リベルティナージュのテーマに対するリベルテのテーマの対置というラクロの思想的意図からいっても必然的な措置であったと考えられる。トゥールヴェル夫人の性格にうかがわれる、ラクロにおけるリベルテの観念の特質については後で触れることになろう。

さて、複雑な問題を提出するのは、ヴァルモンとメルトゥイユ夫人に対するラクロの立場である。それは、単に

ラクロの意図のみならず、『危険な関係』のリアリズム小説としての特質にもかかわる重要な側面を含んでいる。一人の人物の内面構造を、主としてその人物の書簡を通して創造していく（ヴァルモンやメルトゥイユ夫人に対するヴォランジュ夫人その他の解説・評価は、もっぱら彼らの「外見」にかかわる平板なものでしかないことを指摘しておこう）という作業は、作者のその人物に対する位置および小説に託す意図に微妙な影響を及ぼす。たとえば、自己をヴァルモンに擬し、一人称叙述で彼の意識と行動を語っていく作者ラクロにとって、ヴァルモンは自己の内部に存在すると同時に、自己が見つめる対象（オブジェ）としても結像しなければならない。およそあらゆる創造行為に内在しているであろうこの主体―客体の葛藤関係は、『危険な関係』では、ヴァルモンがラクロの自己同一化的願望を含んだ興味の対象であったリベルタンの典型として前提されていることとあいまって、とくに錯綜したアスペクトを呈しているようにおもわれる。その事情は、リベルタンの女性版（libertine）として登場するメルトゥイユ夫人の場合も同様である。作者の内部にあると同時に作者と対立しなければならないという、宿命的な二重性――あるいは主客未分の状態――をアプリオリに負荷された存在であるヴァルモンとメルトゥイユ夫人の人物像には、したがって、作者ラクロの「虚構」と「告白」とが複雑にからみあっているはずである。さらに、ヴァルモンとメルトゥイユ夫人の作中における運命の異同の根底には、ラクロのこの両者に仮託した現実認識あるいは主体的自己表現をともなった心理のあやがひそんでいることもたしかだろう。そして、ラクロのリベルティナージュとリベルテに対する独自の思想的立場の核心もそこに反映していると考えられる。

ヴァイヤンは、ヴァルモンがラクロにとって憎悪の対象であった貴族階級のリベルティナージュ（道徳的放恣）を象徴する人物であったとして、「ヴァルモンに対立するラクロ」というテーゼを提出している。[43] しかし、この見方は、この小説から「貴族階級対ブルジョワジー」という一つの階級闘争の影絵を再構成しようとするヴァイヤンの、自己の仮設した図式に固執しすぎた偏見ではないだろうか。ラクロのヴァルモンに対する感情は、むしろ愛憎

のアンビヴァランスであったとおもわれる。ヴァイヤン自身が示唆しているように、「野心家（アンビシュー）、幾何学者（ジュオメートル）、軍人（ソルダ）」[44]であったラクロにとって、厳密な法則性をそなえたリベルティナージュの世界は、若い頃からの憧憬の的であったと推測される。しかし、『危険な関係』が書かれた頃（ティーの証言によって、この小説は、ラクロがエックス島に要塞を築くため île de Ré の守備隊に居た時――ラクロ三十七―八才の頃――に着手されたとされている）[45]には、リベルティナージュの実践は、決闘と同じように、昔日のような威光と危険性を失い、「一部は社交界の遊戯（ジュ・ド・ソジェテ）と化していた」[46]。

つまり、リベルティナージュは、社交界の「言動規律（レーグル・デュ・ジュ）」と精密に対応した日常的な実践原理としての性格を失ないつつあったのだ。こうした貴族社会におけるリベルティナージュの質的変化――「現実原則」から「遊戯原則」への転換あるいは下落――は、支配階級内部の倫理的自己規制のゆるみ（支配体制の惰性的安定による）を象徴する反面、「演技（ジュ）」の蹉跌が招来する社交生活の慢性的危険性を減少させることにより、抑圧されていた本源的欲求の発散――「演技（ジュ）」の世界からの脱出――をある程度まで容認する、いわば一種のリベルテの精神の浸透（貴族倫理の内部からの崩壊）をも暗示してはいないだろうか。厳格な自己拘束によるスリリングなリベルティナージュの実践を夢見る一方、上昇ブルジョワジーの一員として、個人のリベルテの意識の昂揚しはじめていた現実にも強い共感を抱いていたであろうラクロにとって、こうした貴族社会の過渡的状況は複雑な感慨をひきおこしたに相違ない。――ラクロは、リベルティナージュを前にして執着と拒絶という情念の両極性にひきさかれていたと想像される。このことは、ラクロがヴァルモンを創造していく過程にうかがわれる、リベルティナージュの実践に対する価値意識の両義的性格（アンビギュイテ）からも逆推できる。ヴァルモンの運命――行動と心情の軌跡――には、リベルタンの栄光と失墜という形でラクロの夢と現実が刻印されているのである。

『危険な関係』のリアリズム小説としてのキー・ポイントは、したがって、リベルテとリベルティナージュとい

う二つの価値座標の間でゆれ動くヴァルモンの心理に投影されている、ラクロの二律背反的苦悩の解消の仕方にあるはずである。ヴァルモンに体現されている、リベルティナージュのセオリーにもとづいて厳密に計算された「言動」は、ラクロの夢想の世界で進行する。ラクロは、ティーに対して、ヴァルモンの原型となった「女性と裏切りのために特別に生まれてきたような男」の「打明け話の相手」だったこと、そして「もしその男が宮廷貴族階級の人間だったら(…)」と思い描いたことを告白している。しかしラクロは、この自己の青春時代の情熱の蘇生をエネルギー源とする想像力の構築するリベルティナージュの栄光の世界に、自らの目で実際に観察しえたであろう当時リベルティナージュが現実におかれていた状況、さらには、ひそかに浸透しつつあったリベルテの意識の胎動を織り込まねばならなかった。つまり、ヴァルモンに、自己の生全体を緊縛していた「現実原則」としてのリベルティナージュを、自己の奥深い真実を隠蔽する単なる「遊戯原則」にすぎないものとして捨させるためのファクターを導入する必要性が生じたはずなのである。そして、そのファクターの役目を果たすために案出されたのがほかならぬトゥールヴェル夫人の人物像だったのではなかろうか。

とすると、ヴァルモンの計画的行為の実践に夢想的リベルタンとしてのラクロが投影されている反面、ヴァルモンをひそかに転向させていくトゥールヴェル夫人の性格にはアンチ・リベルタンとしてのラクロのリベルテの観念が宿っているはずである。たしかに、トゥールヴェル夫人の意識構造は、その自己表出的な側面を強調した場合、ことごとくリベルティナージュの基本原理に対するアンチテーゼとして規定されうる。悪徳に対する美徳、無信仰に対する敬虔、不実に対する貞節、自己隠蔽に対する自己露呈、そして「演技」に対する反「演技」。しかしラクロにおけるリベルテの観念を考えるうえでもっとも示唆的なのは、トゥールヴェル夫人の「言動」の根源にひそんでいる自己抑圧的な要素——自己の内的現実に忠実にこたえようとする「自然な感情」の流出に対する気づかい——であろう。なぜなら、自然な女性トゥールヴェル夫人の寡黙な反抗の中によりも、むしろ彼女の犠牲者としての不

安に満ちた状況認識――社会意識――の中にこそ、ラクロの肉眼的なリベルテの観念が、陰画的な実像として鮮かにきざみこまれているとおもわれるからである。――ラクロにとって、人間の幸福を実現するためにもっとも肝要な擁護さるべきリベルテは、いわばなにものにも拘束されない「自然な感情」のおおらかな表現であったといえよう。

ところでラクロは、ルソーから受けついだ社会批判の理念的モデルとしての「自然」の概念を、その「女性論」の基本視座として利用している。そこでは、「自然状態」と「社会状態」というルソー的二分法がそのまま踏襲されているのだが、『危険な関係』において問題となる「自然な感情」は必ずしも「社会状態」とは相いれない概念として捉える必要はないようにおもわれる。『危険な関係』の根底に察知される「自然な感情」の表象形態は、ルソー的な一つの絶対理念的モデルの構成要素としてではなく、むしろ時代の現実に密着した相対的価値――人間の社会的拘束との葛藤の直接的所産――という視点から捉えねばならない必然性をそなえているのではなかろうか。それは、だから、大革命後、ロマン派的道徳主義として通俗化され、体制内に包摂され埋没していく運命にあるといえるかもしれない。ただし、ヴァルモンとトゥールヴェル夫人の心情世界に秘匿されている不可視の相似的構造（「透明」への渇望）は、ルソー的な「自然」概念の射程内におさまるものではないかもしれないが、社会構造の反「自然」的性格に抗して人間の内部に必然的に生じた欲求の一つの普遍的形態として、今日でもなお批判力を保持しえている「自然」的なものとして規定されうる。「女性論」に示されたラクロの社会批判は、しばしば指摘されるように、たしかに抽象的、観念的で歴史的パースペクティブを欠いているが、しかし『危険な関係』では、「自然な感情」の自己抑制に苦悩する人間の状況意識に現実社会の深層構造がオーバーラップしていることによって、そこに一種の血のかよった社会＝歴史認識の萌芽が感じられるのである。

ルネ・ポモーは、「ラクロの意図がルソー的倫理観に強く影響されていること」、そして「『危険な関係』にう

かがわれる社会的問題がラクロのルソー主義者としての視点から捉えられねばならないこと」を指摘した後で、次のように述べている。「『新エロイーズ』の第二部で、サン＝プルゥは、パリの社交界のいく人かの女性の中には、本源的に自然な性質の何かが生息しうることを見い出していた。実際、『危険な関係』においても、二人の犠牲者は、社交界の生活の中で、可能なかぎりの自然な状態にとどまっている女性である〔…〕。」[48]――ヴァルモンとメルトゥイユ夫人の共謀は、まさにセシルとトゥールヴェル夫人に断片的に発露している人間に内在する「自然（ナチュール）」への挑戦・侵略にほかならず、ヴォランジュ夫人がトゥールヴェル夫人に説いたのは、社交界では自己の「自然な感情（サンチマン・ナチュレル）」に則して生きることはむずかしく、そうしようとあえてすることは、自己の身を危険にさらすにすぎないということであった。「自然な感情（サンチマン・ナチュレル）に関する秩序がここではすっかりアベコベになっているように思われる」（注(8)末尾参照）と、パリ風俗を批判したルソーの言葉は、そのままラクロの『危険な関係』に託された社交界認識にも通じるのである。セシルとトゥールヴェル夫人に垣間みられる人間の内部の「自然（ナチュール）」の世界の対極に位置するのが、ヴァルモンとメルトゥイユ夫人の「演技（ジュ）」の世界であるといえよう。そして、この物語の結末（ヴァルモンの心変り――「自然な感情（サンチマン・ナチュレル）」の本来的表出秩序の回復――と、メルトゥイユ夫人――「自然な感情（サンチマン・ナチュレル）」の本来的表出秩序の絶対的否定者――の零落）は、人間の「自然な感情（サンチマン・ナチュレル）」の正常な表出――「自己回帰」を願望する営為――が、社会状態においても実現可能なもの――社会変革を志向する者の価値座標の原点として存立しうる（しなければならない）事象――として提起されていることを示唆してはいないだろうか。

ラクロの創造的立場は、したがって「変革」を志向する動的（ダイナミック）な意識をひそかな中核としていると捉えることができるが、また同時に、純粋な「観察」に依拠した静的（スタティック）な態度をも付帯しているようにおもわれる。つまり、人間に本来的にそなわっている「自然な感情（サンチマン・ナチュレル）」は、『危険な関係』において、たしかに一面ではリベルティナージュ批判（「演技（ジュ）」批判＝文明批判）の有効な理念的武器として機能しているのだが、他方その明確な発現は、リベルティ

ナージュがすでに一つの特殊な「遊戯」に変質し、同時に「言動規律」も現実的意味を失ないつつあった当時の社交界の精神状況の直接的な投影の断片ともみなすことが可能なのである。ヴァイヤンは、ヴァルモンに触れて、「逆説的にも大革命前夜におけるフランスブルジョワジーのあらゆる種類のリベルテに対する渇望の代弁者」[49]と述べているが、ヴァルモンという人物像の象徴性には、革命家ラクロのイメージ（その心理的裏返し＝貴族階級に対する嫉妬も含めて）にもとづくリジッドな階級闘争的発想の射程を越え出てしまう領域がある。ヴァイヤンのこの総括的な表現にうかがわれる『危険な関係』の一見明快な歴史的位置づけは、しかも、ラクロにおけるリベルテとリベルティナージュの観念を混同させる危険をはらんでいる。ヴァルモンの内的ドラマは、すでにみてきたように、ラクロの関心が、自己呪縛の原理としてのリベルティナージュの内部からそれを否定しリベルタンの自己変革を触発するモメントとして浮上してくる潜勢力、いわばリベルテの意識のディアレクティクな発生位相にあったことを示している。だから、ヴァルモンが「リベルテの代弁者」たりうるのは、彼の心的変化（「自然な感情」の自覚的表出に至る）の位相においてであり、そのリアルな形象化の背後には、ブルジョワジーの内部で高まりつつあったリベルテへの希求が、素朴な人間性の回復への衝動という形で、貴族社会の内部でも芽ばえはじめていた現実を鋭敏にキャッチしたラクロの観察眼の存在を考量しなければならないようにおもわれる。

既成道徳に対する反抗原理としてのリベルティナージュの観念の失効、形骸化と、それに逆説的に呼応する人間の「自然な感情」の復権の胎動――一種のリベルテの意識の覚醒――によって、当時の貴族社会の「言動規律」は、かなりの程度まで個人的な気分の露出――自己表現の恣意性――を許容するものに弛緩しはじめていたとは考えられないだろうか。『危険な関係』のドキュメンタリー的性格を信用すれば、リベルタンの「言動」が社交界で受け入れられてはいたものの、すでに旧来の貴族倫理を解体させつつあった「自然な感情」の解禁をひそかに切望する進歩的な（先取り的に時代に迎合しようとする）精神から敬遠されていた興味ある図式を想像することができる。とりわけヴォランジュ夫人（彼女は娘セシルの教育・結婚等に関する態度から十九世紀のブルジョワ的俗物性

を想起させる）のヴァルモンと社交界の関係についての率直な批判的感想（「ヴァルモンのようなリベルタンを受け入れるのは社交界の無分別であり、人々が彼におもねるのは彼の家名と財産ゆえにほかならない…」――「第三十二信」参照）は、そうした微妙な状勢を示唆する一例として注目に値する。さらに、ボードレールが「ブルジョワジーに属する唯一の人間（重要な観察）」と明察したトゥールヴェル夫人のヴォランジュ夫人との親交も、特殊な意味あいをおびてくるようにおもわれる。

一方こうした上流社会で実質的に孤立していたリベルタンのイメージは、ラクロの仕組んだ基本的なフィクションともみなすことができる。しかし、フィクションあるいはドキュメンタリーのいずれであるにせよ、『危険な関係』のリベルタンを取り巻く状況規定が、リベルティナージュの実践およびその成果に対する価値意識が稀薄になっていた現実を逆照していることはたしかである。いいかえれば、当時の貴族社会には、それを意志的な改革志向の所産とみなすか支配階級の長期的固定化に必然的にともなう堕落状態とみなすかは別として、厳格な「言動規律（レーグル・デュ・ジュ）」の風化現象にもとづく一種のリベルテの風潮（気ままな空気）が拡がりはじめていたと推測することが可能である。あるいはこうもいえるかもしれない――厳密な法則に支配されたリベルティナージュが衰退し、法則を無視した異次元の（骨抜きにされた）リベルティナージュがそれに取ってかわろうとしていたのだと。とするとリベルタン・ヴァルモンの思想と行動は、彼にとっては堕落以外の何物でもないこうした貴族社会の倫理的変化――リベルティナージュの質的低化――に対する一つの宣戦布告であったということになる。そして、ヴァルモンを背後から牽制・誘導しつつ、彼の変節（敗北）の後もリベルティナージュの鉄則を守り通すメルトゥイユ夫人の存在も、小説の戦闘的構造の必然的な要請にもとづくものとして理解される。ヴァルモンとメルトゥイユ夫人の友情は、貴族社会の伝統的「言動規律（レーグル・デュ・ジュ）」を支える倫理基盤の漸進的陥没（貴族倫理のブルジョワ化）によって孤立化した人間としての、共通の疎外者意識に根ざしていたのだ。そして、もはや時代遅れとなったリベルティナージュの厳格な実

践によって、権威を喪失した社交界に反省を促すべく、果敢な攻撃を試みたのだ。それはしかし、彼らに自らのアナクロニズム（そして、この二人のアナクロニズムは、栄光のリベルタンを夢見つつも現実を厳しく見すえたラクロの一種醒めた執念にも似た想像力によって、奇妙な生命力とリアリティーを吹き込まれている）を認識させるだけだった。もはや過去の遺物と化しつつあった厳密な法則性をそなえたリベルティナージュの観念を理解できる人間は、彼らの周囲には見い出せなかったのだ。彼らの技量を充分に発揮するにふさわしい相手は、すでに歴史的役割を果たしおえ、過ぎ去った栄華の闇の底に没していたに違いない。ヴァルモンとメルトゥイユ夫人は、最初から時代の徒花としてしか生きることを許されない状況にあったといわなければならない。しかし彼らは、そのアナクロニズムの全体性によって、逆説的にも貴族階級の没落に対するもっとも鋭敏な危機意識を体現している。

結び

ヴァイヤンは、「『危険な関係』の中でもっとも奇妙なヴァルモンとメルトゥイユ夫人を結ぶきずな[60]」について、次のように述べている。「きわめて特殊な種類の愛情。自らが全身全霊でもって挑む「賭け」の完全な無益性、絶対的な無償性を同程度に意識した二つの存在の相互的な思いやり。私は、かくも総体的に絶望的なものは何も知らない。これこそ、『危険な関係』〔…〕に深い人間性を付与しているものなのだ。[61]」

ヴァルモンとメルトゥイユ夫人の書簡のはしばしには、たしかに形骸化した「賭け」の現実認識に根ざす心理的・精神的疎外感が漂っている。それは、貴族倫理の変化（解体）に自らを適応させ、歴史の流れに参与（追随）していくことができない二人のリベルタンの「演技」の価値暴落にともなう焦燥感ともいえよう。この二人に、真のリベルタンとしての精神の緊張感と充足感を一時でも味あわせてくれる残された唯一の道は、お互いが敵対関係を

意識すること以外にない。ここにおいて、トゥールヴェル夫人との関係でラクロが巧妙に仕組んだヴァルモンの運命の伏線は、有効に作用する。ヴァルモンは、ついに時代の波にのまれ、自己の「自然な感情（サンチマン・ナチュエル）」を吐露するというリベルティナージュの原理に対する重大な背反行為を犯し、メルトゥイユ夫人の謀略で葬られる。ヴァルモンとメルトゥイユ夫人との対決は、いわば共通の「行動原理」を奉じていた二人の人間の孤独な内ゲバにほかならない。

さて、ヴァルモンとメルトゥイユ夫人という独自の厳格な「行動原理」で武装したリベルタンを、十八世紀末のタガのゆるみかけた貴族社会の中に出現させたラクロのおそらくは半意図的なアナクロニズムによって、『危険な関係』はユニークなリアリズム小説になりえた。ラクロは、はからずも、当時すでに伝説的になりつつあった厳密な規範に依拠したリベルティナージュの完璧な再現とそのまったき崩壊を、同一時空で描くことによって、歴史を変えつつあったリベルテの意識の息吹きを示唆し、きたるべき貴族社会の失墜を予告したといえる。とってつけたようなメルトゥイユ夫人の破滅は、当時グリムやラ・アルプ等の批評家から非難の的になったが[63]、ラクロは、リコボニ夫人との往復書簡の中で[64]、アンチ・メルトゥイユとしての自己の立場を強調している。ジョルジュ・メの言うように、『危険な関係』の序文（ラクロはここで、この書物を醇風美俗に役立てる目的で書いたことを強調している）と結末は、「小説の主要な機能を道徳的説教[65]」とみなしていた当時の一般的風潮に迎合した証拠かもしれないが、しかしそうした風潮にしたがいつつも、そこに自己のひそかな創造上の葛藤を鋳込まねばならなかったであろうラクロの苦心も読み取らねばならない。ラクロがその文才をもっとも生き生きと発揮したのはメルトゥイユ夫人の書簡においてであり、そのことは、彼の若き日からの夢であった普遍的な「演技（ジュ）」の意識に支えられたリベルティナージュの世界を喪失した貴族社会に対する愛惜の強さを物語っている。リベルティナージュのセオリーの完璧な体現者メルトゥイユ夫人を登場させたこと自体が、ラクロの意識的なアナクロニズム（またフェミニスト・ラクロの同時代の女性抑圧に対する痛烈なイロニー）であったとするならば、その抹殺は、歴史の現実に焦点を合わせ

たこの小説の必然性の道程から逸脱した唐突なものにならざるをえない。したがって、ラクロ自身の時代認識は、やはりヴァルモンの心的運命を中心とした、リベルテの意識の胎動に反映しているとみなすべきであろう。『危険な関係』は、炯眼な現実主義者ラクロの、リベルテへの讃歌を巧みに共鳴させたリベルティナージュへの挽歌であったといえよう。

（一九七四年一月）

注

（1）ホイジンガ、『ホモ・ルーデンス』（高橋英夫訳、中公文庫）、三五六ページ。

（2）同右三八〇ページ。

（3）同右三八一ページ。

（4）一九七三年九月二十二日、京都大学における『自由の創出』（《L'invention de la liberté》）と題された講演において、ジャック・プルースト（Jacques Proust）は、十八世紀フランスにおけるリベルテの観念の歴史的発展を豊富な引用を駆使しつつ明晰・簡潔にあとづけた。なお講演ではもっぱらリベルテの観念に重点がおかれ、多様な歴史的屈折をみせたリベルティナージュの観念についての説明が不充分だったこと、および、この小論で扱う『危険な関係』の主人公が、当時リベルタン（リベルティナージュという言葉の語源）と称されていた人間の社交界における一典型として規定されていること等を考え合わせ、リベルティナージュの観念についての比較的詳細な解説を付記するつもりだったが、紙幅の都合上割愛せざるをえなかった。『危険な関係』との関連でロジェ・ヴァイヤンの説明を引用するにとどめたい。《[…] qu'est-ce qu'un libertin? C'est, nous rapporte Littré, l'homme ((qui ne s'assujettit ni aux croyances ni aux pratiques de la religion)). Le mot désigna d'abord, au XVIe siècle, une secte protestante, venue des Flandres, qui professait que l'âme meurt avec le corps, et qui entra en lutte à Genève avec Jean Calvin. Dans ce temps-là, on rouait les libertins; on les a encore roués, un peu partout dans le monde, tout au long du XVIIe siècle. Même si son matérialisme, comme il arriva plus tard, ne se manifeste que dans la

liberté de ses moeurs, le libertin risque gros. 〔…〕 il met délibérément en jeu le salut de son âme. L' Eglise, c'est bien connu, a toutes les indulgence pour les ((faiblesses)) de la chair. Mais le libertin ne *cède* pas à la chair, il choisit délibérément de la satisfaire, il proclame bien haut la légitimité de ses désirs. Il n'y a pas un mot de repentir tout au long des *Liaisons dangereuses*. Le séducteur par système, le libertin compromet sa vie éternelle exactement au même titre que le matérialiste, parce que comme lui il s'insurge, défie, nie l'autorité, jure gu'il ne demandera jamais pardon.≫ (Roger Vailland, *Laclos par lui-même*, éd. du Seuil, pp. 49—50.)。

(5) 十七世紀初頭に、主として libertin (無神論者・自由思想家) の思考形態・精神的傾向を指示する概念として創案された libertinage という言葉は、libertin がとりわけその無神論のために執拗な偏見・迫害の対象となりその反秩序の意思表現が恣意的・拡散的になることによって、人間の既成道徳から離脱した素行（とりわけ批判精神がもっともラディカルな自己投人をする性的領域における）という風俗的次元での派生概念を生じ、十八世紀には、もっぱら「道徳的逸脱(性的放恣)」という観念に指示内容の質的レヴェルが移行した。ただし、リベルティナージュという言葉は、あくまでも、自由思想（無宗教）への執着と放蕩生活への傾斜という二つのアスペクトを包含していた。ちなみに当時の libertin の定義を次に若干引用しておく。

① ≪impie, débauché.—Qui suit sa pente naturelle sans s'écarter de l'honnêteté.≫ (Richelet, 1680). ② ≪Qui aime trop sa liberté et l'indépendance. — Qui fait une espèce de profession de ne point s'assujétir aux lois de la religion.≫ (Dictionnaire de l'Académie, 1762).

(6) cf. Denis Diderot, *Le Neveu de Rameau*, éd. J. Fabre, Droz, 1950, p. 3.

(7) cf. *Ibid.*, p. 42. なおディドロは、『ブーガンヴィル航海記補遺』その他の作品においても、人間の本能的欲求の解放に関する大胆な提言を試みているほか、ソフィー宛ての手紙の中でも、リベルタンおよびリベルティナージュについて彼独特の寛容な見解を示している (cf. *Correspondance de Diderot*, éd. Roth et Varloot, éd. Minuit, 1953—1970, 16 volumes, Ⅲ, pp. 330—331)。

(8) cf. J.-J. Rousseau, *OEuvres Complètes II*, Bibliothèque de la Pléiade, pp. 265—278 (*Nouvelle Héloise*, 2e partie, lettre XXI)。サン＝プルゥからジュリーに宛てられたこの手紙は、パリに住む人間達の浮薄な社交生活、とりわけそのリベルティナージュ（放恣な男女関係）の実体を、ルソー独自の社会道徳観から描写・批判している。ちなみに、

この小論で扱う『危険な関係』が『新エロイーズ』の影響のもとに書かれたこと、そのパロディーとしての性格をそなえていること等はしばしば指摘されているが、たとえばジャン・ルーセは次のように総括している。「『危険な関係』は倒置(ランヴェルセ)された『新エロイーズ』として姿をあらわす。ジュリーの周囲で生じる秩序と階調への上昇運動は、メルトゥイユ侯爵夫人という同じく主調となる女性像をめぐる無秩序と不調和への下降運動として逆投影される。だから、このメルトゥイユ侯爵夫人とは、ジュリーとトゥールヴェル夫人――サン＝プルゥのまったき対立物である男ヴァルモンの犠牲者――の負性(ネガティブ)的なイメージにほかならない。」(Jean Rousset, *Forme et signification*, 1962)。とりわけ『新エロイーズ』の第二部・第二一信は、『危険な関係』に示された精神世界の歴史的・社会的背景を考えるうえで、一つの貴重な手がかりを与えてくれるようにおもわれる。ラクロとルソーに共通する思想は、この手紙の中のたとえば次のような一文に集約的に表現されているのではなかろうか。《Il semble que tout l'ordre des sentiments naturels soit ici renversé.》(J.-J. Rousseau, *OEuvres complètes II*, *op. cit.*, p. 270).

(9) Roger Vailland, *Laclos par lui-même*, éd. du Seuil, pp. 165—166.

(10) *Ibid.*, p. 28.

(11) Choderlos de Laclos, *OEuvres complètes*, Bibliothèque de la pléiade, p. 407.

(12) R. Vailland, *op. cit.*, p. 28.

(13) 『危険な関係』の批評史を概観するには次の研究書が便利である。A. et Y. Delmas, *A la recherche des Liaisons dangereuses*, Mercure de France, 1964.

(14) Laclos, *OEuvres complètes*, *op. cit.*, p. 714.

(15) cf. *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, Mai-Août 1968 (Dix-huitième Siècle), p. 619 (article de R. Pomeau : D'《Ernestine》aux《Liaisons dangereuses》: le dessein de Laclos).

(16) ラクロが『危険な関係』で示したリベルティナージュの観念は、その本質においては十八世紀の哲学的転成(フィロゾフィック)の系譜につらなるものであるが、現象的には上流社交界という閉鎖的な環境に生じた一つのきわめて特殊なヴァリアントであることに留意しなければならない。ヴァイヤンは、十八世紀後半のフランス上流社会におけるリベルタンおよびリベルティナージュについて、次のように述べている。「十八世紀の後半に実践された劇的な社交遊技〔現実にとけこんだ社会的遊技〕としてのリベルティナージュは、十六・十七世紀の英雄的なリベルタンが神・祭壇・王座に対して投

げつけた挑戦を演劇的なやり方で模倣する。英雄時代のリベルタンは、神と神に対する畏怖を助長し利用した市民政治機構に拘束されないことを主張し実証した。リベルタンと呼ばれたのはそのためである。一方社交界のリベルタンは、恋愛——当時の社交界の一大関心事——に拘束されないことを主張し実証する。社交界のリベルティナージュの本質的規則とは、したがって、誘惑者が決して誘惑されないということである。」(R. Vailland, *op. cit.*, p. 55).

(17) Laclos, *OEuvres complètes, op. cit.*, p. 27. (上)四八、(なお『危険な関係係』からの引用はすべて邦訳——『危険な関係』(上)(下)、新庄嘉章・窪田般弥訳、新潮文庫——を借用した。漢数字は邦訳のページを示す。以下同様)。

(18) *Ibid.*, p. 267. (下)一一二。

(19) R. Vailland *op. cit.*, p. 51.

(20) Georges Poulet, *Etudes sur le temps humain, t. II*, plon, 1952, p. 77.

(21) Laclos, *Les Liaisons dangereuses*—chronologie et préface de R. Pomeau, Garnier-Flammarion, p. 12.

(22) Laclos, *OEuvres complètes, op. cit.*, p. 18. (上)三二。

(23) *Ibid.*, p. 22. (上)四一。

(24) *Ibid.*, p. 233. (下)五五。

(25) *Ibid.*, p. 304. (下)一六九—一七〇。

(26) *Ibid.*, p. 366. (下)二六九。

(27) cf. R. Vailland, *op. cit.*, p. 55.

(28) Laclos, *OEuvres complètes, op. cit.*, p. 16. (上)二九。

(29) *Ibid.*, p. 349. (下)二四三。

(30) 《être》と《paraître》のテーマに関しては、とりわけ次の二つのスタロバンスキーの著書が参考になった。①Jean Starobinski, *Jean-Jacques Roussean, la transparence et l'obstacle*, plon, 1957. ② Jean Starobinski, *L'oeil vivant*, Gallimard, 1961.

(31) cf. Laclos, *Les Liaisons dangereuses* (présentation par Yves le Hir), Garnier, p. XXVII.

(32) Laclos, *OEuvres complètes, op. cit.*, p. 249. (下)八三。

(33) *Ibid.*, p. 31. (上)五五—五六。

(34) マリヴォーの小説をも含めた作品全体における「外見」と「実体」のテーマについては、今は触れる余裕がないが、次の研究書が有益な示唆を与えてくれる。Harold Schaad, *Le thème de l'être et du paraître dans l'oeuvre de Marivaux*, Juris Druck+Verlag, Zürich, 1969.

(35) cf. J.J. Salomon, 《Liberté et libertinage》, *Temps Modernes*, juillet. 1949, pp. 55—70. 『危険な関係』におけるリベルテとリベルティナージュとの関係に着目し、鋭い考察を展開したサロモンは特筆すべき批評家の一人であろう。ところで彼は、ヴァルモンとメルトゥイユ夫人という二人のリベルタンが、そのリベルティナージュの観念と行為そのものによってリベルテを享受し発揚しているとみなしている。つまり、この小説の思想的核心を、既成秩序に対する挑戦者としてのリベルタンが、犠牲者たるトゥールヴェル夫人とセシルに彼らと同じようなリベルテと美徳の観念を植えつけるように教育する点にある、と捉えているのである。しかし、『危険な関係』においてもっとも注目すべきリベルテの問題は、サロモンの言うような、一つの自己完結的な観念哲学(孤独な形而上的反抗)として歴史に逆行し、現実から遊離してしまったリベルティナージュの観念の射程内におさまるものではない。それは、トゥールヴェル夫人とヴァルモンの「自己覚醒」と「苦悩」に象徴されている人間の「自己回帰」への欲求の発現とその社会的運命という、いわば人間の意識と存在の葛藤ドラマの新たな展開のまくあけを予告する歴史的社会的現実の深層構造の発見を内在させたもの——大革命後の近代リアリズム作家の主要テーマに本質的に連接する命題を含んだもの——である。この小説の思想的パラドックスは、リベルティナージュの観念が、なんらの義務も含まないことによって人間にリベルテの意識を享受させる理念という本道から逸脱し、逆にその実践原理そのものが、社会構造と人間関係の複雑化にともなう近代的個人の二元分裂の陥穽に陥り、抑圧的な「演技」の義務を生み出すことによって、真のリベルテの喪失を表現している点にある。ヴァルモンとメルトゥイユ夫人は、「演技」の内部において一種の完全なリベルテを享受するという現象そのものによって、逆に彼らの「真の存在」(être véritable) から完全に疎外されているのである。——ヴァルモンの内面変化は、したがって、リベルティナージュの内包していた反抗の観念それ自身が自己疎外の基因に反転してしまっていることへの覚醒——自己を真に解放する反抗原理(リベルテの観念)発見への端緒——を示唆しているといえよう。ついでに付言すれば、ラクロがヴァルモンの変節に封入した「自然=幸福」という等価構造へのロマン派的道徳主義的確信に俗流化する反抗原理(リベルテの観念)は、その後、ロマン主義の自己否定的位相として浮出してきた人間の「本性」に対する根本的懐疑——人間意識にひそむアプリオリな暗黒面への関心

――が、作家・批評家あるいは文化諸科学の主要テーマとなって久しい今日、もはや十八世紀的な一元的有効性や普遍性をもちえないだろう。一方、十九世紀以後、消極的反抗の一形態（享楽家・頽廃家のイロニー）と化してしまったリベルティナージュの観念を、積極的な反社会思想（反抑圧理念）として復権的に再創造しようとする試み――現代的リベルタンの存立意義の探究――は、皮肉にもほかならぬラクロに学んだヴァイヤンによってもっとも自覚的に遂行されたようにおもわれる (cf. R. Vailland, *Drôle de jeu* (1945), *Le Regard froid* (1963) etc.)。

(36) A. et Y. Delmas, *op. cit.*, p. 414.

(37) cf. Laclos, *Les Liaisons dangereuses* (présentation par Yves le Hir), Garnier, p. XXIX.

(38) Laclos, *OEuvres complètes*, *op. cit.*, p. 32. (上)五七―五八。

(39) *Ibid.*, p. 300. (下)一六四。

(40) *Ibid.*, p. 304. (下)一七〇。

(41) *Ibid.*, p. 70. (上)一二二。

(42) *Ibid.*, pp. 908—709.

(43) cf. R. Vailland, *op. cit.*, pp. 5—11.

(44) *Ibid.*, p. 51.

(45) cf. Laclos, *OEuvres complètes*, *op. cit.*, p. 708.

(46) R. Vailland, *op. cit.*, p. 51.

(47) Laclos, *OEuvres complètes*, *op. cit.*, p. 708.

(48) *Revue d'Histoire Littéraire de la France*, *op. cit.*, p. 624.

(49) *Ibid.*, p. 619 (cité par R. Pomeau).

(50) R. Vailland, *op. cit.*, p. 135.

(51) *Ibid.*, p. 138.

(52) cf. Laclos, *OEuvres complètes*, *op. cit.*, pp. 698—704.

(53) cf. *Ibid.*, pp. 686—698.

(54) cf. Georges May, *Le dilemme du roman au XVIIIe siècle*, P. U. F., 1963, pp. 254—256.

〔付記〕

（1）引用文中の傍点はすべて小論の筆者による。

（2）『危険な関係』およびラクロに関する影響関係とbibliographieは次の研究書にくわしい。Laurent Versini, *Laclos et la Tradition ; essai sur les sources et la technique des Liaisons dangereuses*, Klincksieck, 1968.

（3）いわゆるヌーヴェル・クリティックの批評家達による『危険な関係』論もさかんで、小論中に引用したプーレやルーセのものはその嚆矢といえるが、最近ではフォルマリスム理論に立脚した構造分析が注目に値する(ex. Tzvetan Todorov, *Littérature et signification*, Larousse, 1967)。また次の研究書は、フォルマリスト的視点の有効性を検討したうえで、『危険な関係』解釈の様ざまな問題点を整理しているので、今後の研究の指針を定めるのに有益である。Henri Blanc, *Les Liaisons dangereuses de Choderlos de Laclos*, ≪Poche Critique≫, Hachette, 1972.